

青年ならびに成人における一体感への願望について

杉 原 保 史

一 はじめに

本小論においては、青年ならびに成人における「一体感への願望」とでも言うべきものをめぐって考察してみたい。そもそも一体感への願望とはどういう概念で何を意味するのか、それ自体が検討を要することであり、この後、それを検討してゆくつもりであるが、ともかくこの論考は、日常語としての一体感への願望という言葉のイメージをそのままに受け入れるところから出発するものである。というのも私の問題意識は、心理療法において青年期のクライエントと会っていて、ごく素朴に、「一体感への願望」という言葉がびったりくるものを強く感じたことに発しているからである。そこでは、この言葉は未だ概念的に何ら洗練

されたものではなく、日常語の域を出るものではない。それを洗練させてゆくことが本稿の目的なのである。

ただし、この場合の洗練とは、この言葉を一義的に明確に定義するというようなことではなく、むしろ逆に、この言葉が持つ多様な意味をそのままに明確化すること、私は考えている。というのも、概念として曖昧さを切り捨ててゆくと、この言葉が持つイメージとしての生命力が失われてしまうからである。たとえ時には概念的な矛盾を孕むことになったとしても、矛盾を排除してこの言葉を切り刻んでしまうよりは、その矛盾の意味を明確にする方がより建設的であるように思われる。臨床心理学においては、過去、多くの概念が曖昧であるとして批判されたり、一義的な再定義が試みられたりしたが、そのような批判や

再定義は生産的なものとはなってこなかったように思われるのである。^①

もとより、「一体感への願望」あるいはそれに関連するテーマをめぐる文献は豊富にあり、すでに洗練された有用な概念化も各所に見られるが、それらを参考にしながらも私なりに発見的な考察をすることによって、この領域に対するいくばくかの貢献となればよいと思う。^{②③}

二 一体感への願望を感じさせた臨床素材の検討

さて、私は青年期のクライアントとの面接において「一体感への願望」を感じ取ったと述べたが、具体的には彼らのどのような言動にそれを感じたのかを、まずここで検討してみたいと思う。^④これによって、この論考の出発点となった個人の体験的素材を読者と共有し、この論考に健全な基礎を与えることが出来るだろう。しかし、それ以上にここで明確にしたいのは、私の中に一体感への願望というイメージを喚起することとなった、決定因の性質である。つまり、どこから一体感への願望を感じたのか、その決定因をたどっていくと、それは一つに収束してゆくのではなく、必ずしも一通りにはまとめられない多様な内容へと到

達する。とはいえ、それら多様な起源は、それぞれが独立して一体感への願望というイメージを明確に指し示しているわけではない。一つ一つを単独に取り出して眺めると、それほどはつきりしない。しかし全体的な雰囲気は、一体感への願望という言葉を強く連想させるのである。言ってみればこれは和音に似ている。多様なボテンシャルが同時に鳴り響いた結果、その全体的な和音として、一体感への願望というイメージが浮かび上がってくるのである。

1 事例1〈21歳の神経性大食症 Bulimia Nervosa の女性〉

i 事例の概要

二人姉妹の長女。小学校から中学校にかけて、時折ひどい自家中毒を起こし、また、高校からはそれに代わって神経性胃炎で時に医療にかかっていた。そのように身体化された問題はあったが、(身体化の傾向が強い人にはありがちなように)その他の面ではおおむね手がかららないしっかりしたよい子として育ったと言える。ところが、大学2年から学校生活に無気力となり、同時に、食行動に強迫的なコントロールを加えるようになった。極端なダイエットと、過食、その後の意図的な嘔吐とが繰り返されていた。そのため心理療法を受けることとなった。

面接の進行につれ、無垢で無力で両親に依存的・服従的なよい子の面の影に、食欲で満たされておらず怒りに満ちた餓鬼のような面が、ちらちらと姿を現わすようになってきた。すなわち、両親に反発して、衝動的に家を飛び出したり、彼氏に思いつきり不満をぶちまけて喧嘩したりするようになった。

彼女は、以前であれば、不服な時にもそのように怒りを表わすことはなく、黙って引き下がっていた。「わがままを言っちゃいけない」という気持ちからそうしていたのだが、その気持ちのすぐ下には「こんな風に扱われるなんて、どうせ私は愛されていないのだ」という不満が隠されていたのである。両親に対するそのような敵意を抑圧していたためだと思われるが、小さい頃から彼女は、親、特に母親の機嫌に過剰なほどに敏感であり、少しでも母親の機嫌が悪そうだととても不安になり、自分が母親の気分を害したのではないかと心配したと言う。

ii 一体感への願望を感じさせたもの

さて、このケースにおいて、私は、クライエントの言動の様々の局面に、一体感への願望を感じ、あるいは読み取ったのであるが、それについて考えてみる。これを考えるにあたって、面接における二つの素材を区別し、それぞれ

に関して述べることにしたい。すなわち、(A)面接において語られた話の内容と、(B)セラピストとクライエントとの関係そのもの(転移・逆転移)、である。

(A)面接において語られた話の内容から

(1)赤ちゃんへの憧れ

クライエントは、ごはんとおかずという食事をせずに、その代わりに、ふわふわのパンとかアイスクリームとかを好んで摂っていた。歯応えのあるものは避け、やわらかいものを摂っていた。たとえば果物でも、りんごは食べず、いちごやバナナや缶詰みかんなら食べるというように。クライエントは自らそれを「赤ちゃんみたい」と評していた。また、理想の状態について話して、それは赤ちゃんだと言う。一歳ぐらいの赤ん坊を見て、「私みたいに色々考えず、お腹が減ったら食べて、興味があつたら遊んで、気に入らなかつたら泣く。赤ちゃんが一番いい。」と言う。

(2)全面的に受け入れられることへの依存的・受動的な願望
「何にも考えんと楽しくしてくれて、一生懸命がんばったんやし、ええやんかと言ってくれる人がいないから、人に会いたくない。何となく皆、がんばりなさいと言っているような気がして。」

このようなクライエントの言葉は、先の赤ちゃんへの憧

れと通じるものがある。誰も赤ちゃんにがんばりなさいとは言わない。赤ちゃんは、何をしても受容される。完全に常にそうではなくとも、少なくとも大人よりはそうである。そして、赤ちゃんは大人の目から見れば、受動的である。抱っこされ授乳されている赤ん坊の現実の主観的な体験としては、持てるかぎりの認知的・運動的能力を集中させて、一生懸命に能動的に乳を飲んでいのだとしても、赤ちゃんのそのような内的体験を預かり知らない大人の目から見れば、受動的に見える。

(3)何も考えない状態への願望

先の(1)と(2)いずれにおいても、その中で「何も考えない」状態への憧れが語られていた。赤ん坊は認知が未発達であるから、自己と他者、あるいはその関係といったものの認知が、断片的には存在するとしても、有意味なやり方では組織化されていない。したがって、人間関係をその認知にもとづいて心配することはない。また、人格の構造化も未発達であるから、自分の中にコントロールする部分と、コントロールされる部分とが未だ分裂していない。したがって、そうした人格の低位構造間の摩擦や葛藤にわずらわされることもない。クライエントには、このような心理状態への願望が強い。これを、体験の即時性、無反省性、全体

性への願望と言ってもよいであろう。

(4)現在の葛藤や苦しみからの逃避の願望

「今はどこにいても誰にいても安らげる場所はない。」
「フーッと消えて、どっかちゃうとこで全然違う人間になつてのんびり生きられたらいいと思う。」

彼女を話を聞いていると、現在はおっぱい葛藤状態と見なされており、他方では、どこかに完全な無葛藤状態の彼岸があるというファンタジーがあり、その彼岸に対する憧れの気持ちが感じられる。

(B)セラピストとクライエントとの関係そのものから

このクライエントとの面接において、私は、時に彼女を抱きしめたい衝動に駆られた。たとえば、クライエントがダイエット・過食・嘔吐のパターンを何とか止めようと彼女なりにけなげな努力を払った様子を語った後に、「疲れたな」と、一言ぼつりと洩らし、一筋の涙が頬をつたった時——こういった瞬間に、私はクライエントを抱きしめたい衝動に駆られたのであった。

このように言うと、それはクライエントの一体感への願望ではなく、セラピストの側の一体感への願望ではないか、すなわち逆転移ではないか、と批判されそうである。そのような批判を否定するつもりはないが、私としては、この

ような気持ちがアブリオリに私から彼女に投げ掛けられたものではなく、彼女との面接の中で反応として喚起されたものであるという点に注目したい。私の中に一体感への願望を呼び起こしたのは——確かに私の中にそのような願望が存在するからだとしても——、彼女の側の一体感への願望であると私は考える。

この事例に関してはこの位にして、もう一つ別の事例を挙げてみることにしたい。

2 事例2〈24歳の希死念慮が強い女性〉

i 事例の概要

中学生の頃から、時に母親に対して暴力を振るう。高校では対人恐怖のため、一年生の時ほとんど出席できず、留年した。短大を卒業後、就職するが2年ほどで辞め、その後アルバイトなどをするが、いずれも長続きしない。中学か高校の頃から「死にたい」と思うようになり、就職してから後、睡眠薬、ガス、手首を切るなど、何度も自殺企図がある。精神科医や心理療法家への、いわゆるドクター・ショッピングがあり、あちこち転々とするうち、24歳の時点で私のところへ来談することとなった。

面接によって明らかになったことだが、同僚など、周囲

の人のちょっとしたつれないそぶりが、このクライエントに非常な傷つきをもたらし、見捨てられたという激しい恨みの感情を喚起した。そういう時には、クライエントは手首に傷をつけ(動脈を切るほど深い傷ではないが)、それは一種の嗜癖のようになっていた。また、このクライエントも食行動に異常があり、過食であることが分かった。ただし、事例1のように過食の後で嘔吐することはなかった。

クライエントは、「頼りだすと駆け込み寺みたいに思ってしまうから……」と言うように、内心に強い依存心を抱いており、その一方で、その依存心がセラピストに向かってあふれだして制御不能になることを恐れていた。面接を重ねると依存心がつのる、依存心がつのとそれが突出することを恐れて面接を止めたくなる、しかし面接に来て依存心を満たしたい、と来談に対して非常にアンビバレントな態度を示した。やがて、この依存心は恋愛感情と溶け合い、いわゆる転移性恋愛の様相を示すようになった。クライエントは、面接を打ち切ろうとしたが、結局は、セラピストにはつきりと恋愛感情を告白し、それが叶わないと知った上で、面接を続けることが出来て、より安定した関係を持てるようになった。

ii 一体感への願望を感じさせたもの

さて、この事例においても、先の事例1と同様に、私の中に「一体感への願望」というイメージを喚起させる決定因となったクライエントの言動を検討してみたい。ただしここでは、事例1と重なる内容は省略する。

(A)面接において語られた話の内容から

(1)主体性、責任性、自己決定を放棄したいという願望

「いつも誰かに傍にいてもらって、ああしたらどう、こうしたらいいんじゃない、それでいいよ、とか言ってもらいたい。」

クライエントはこうした願望をたびたび口にしていたが、これは、自己の主権・支配権を他者に委譲し、自己は他者の命令の単なる執行機関に成り下がりたいということを意味するものである。

(2)死への願望

そもそも、このクライエントの中心的な訴えである希死念慮も、すなわち、主体性や責任性を帯びさせられた自己を抹消したいという願望であって、(1)と通じるものである。

(3)分離に対する傷つきやすさ

クライエントは、同僚が自分のことを気に掛けずさっさと歩いていった、というような、ちょっとした分離のほの

めかしを拒絶と受け取り、非常に敏感に反応した。これは、そもそもクライエントが、分離なき一体感的世界を他者にごく当然のこととして期待できるという前提に立っていることを意味している。

(B)セラピストとクライエントとの関係そのものから

事例の概要において述べた通り、クライエントはセラピストである私に対して、強い依存心を向けてきたが、それはやがて性愛と溶け合って、いわゆる転移性恋愛となっていた。性愛は、その頂点においては、心身にわたる全体的な一体感の体験をもたらすものであり、クライエントのセラピストに対する恋愛には、急激な一体感への願望が感じられたのである。^⑤

一体感への願望というものは、このように、クライエントが語った様々な言葉の断片、クライエントが私に向けてきた感情、それに反応して私のなかに喚起された感情、これらのものが全部からみあって、私の中に生じてきたイメージである。これらを眺めてみると、依存の問題、死の問題、性愛の問題、など、様々な問題がからんでいる。これだけ様々の問題を一つの問題の下に含めるのは大雑把すぎると言われるかもしれない。しかし、だからといって、こ

れは依存の問題で一体感への願望とは違う、これは死の問題で一体感への願望とは違う、という具合によけていってしまうと、最後には何も残らないのである。混沌に目鼻をつけたら混沌は死んでしまう。だから、私としては、たとえつかみどころのない概念ではあっても、ただありのままを受け入れて、その得体の知れない混沌に、さしあたって一体感への願望という名前を付けておくのである。

以上、ここでは二つの事例を挙げて、一体感への願望という言葉を私が用いる背景にある体験を提示し、検討した。それによって、この言葉の生きたイメージがある程度伝えられたのではないかと思う。

三 治療的対応を考える

さて、上述の如き一体感への願望は、心理療法においてどのように変化してゆくことが予想されるのであろうか。そして、そこで治療者のすることは何なのであろうか。前節においては、一体感への願望にあくまで密着し、ありのままに記述することを心掛けたが、本節においては、多少の距離を置いて、治療的対応について考えてみたい。

1 見立てとそこから期待されるストーリー

これらの事例に共通して認められることだが、いずれのクライエントも、非常に強い依存心、受動的に満たされたという期待を内心に抱いている。しかし、それは秘められた思いであり、あからさまに表現されてはいない。そして、その期待が裏切られた時にも、その不満をあからさまに表現しはしない。不満を表現するということは、相手に期待していることを認めることである。相手に期待していることすら認めていない彼女たちが、期待が裏切られた不満を認めようはずはない。まして、能動的な行為によってその不満を解決しようとするはずもない。しかしながら、実のところ内心には、非常な不満が渦巻いており、対象に対する恨みの気持ちは秘かにのつてゆくのである。潜行したその恨みの気持ちは、症状形成に力を与えているように思われる。

彼女たちの自我意識は、自分が真に依存することを、より正確には、本来のありのままの依存心を満たすよう対象に期待し、それが満たされないがために、かんしゃくを起こしたり、わがままを言ったり、恨みをぶついたりすることを恐れている。そして面接では、むしろ、甘えないきちんとしたよい子として、自分の状態をきちんと報告し、先

生の言うことを伺おうという態度を表に出している。表面的には、甘えない、自立した態度を示しており、あたかも内心の依存心を卒業し断念した「大人」であるかのように振る舞っている。しかしながら、実はその期待が満たされないことを、本心では受け容れていないのである。

このようなクライエントに、甘えてはいけないとか、恨んでも無駄だとか言って説得しても役に立たない。そのようなアプローチは、クライエントのよい子的な自我防衛を強めさせることになり、逆効果である。

クライエントの精神内界的力動を、以上のように見立てたなら、そこから必然的に以下のようなストーリー展開が期待される。(蛇足ながら誤解のないよう付け加えておくが、これは、見立ての中にすでに萌芽的な形で内包されているストーリーが、それ自体の必然性にしたがって自然な形で開花したならこうなるだろうという展開の予想であって、クライエントがこのように変化するべきだという価値の押しつけではない。)

- ①クライエントが内心の依存心を受け入れ、表現する。
- ②クライエントが依存心にある程度現実満足させる。
- ③クライエントが対象への恨みを受け入れ、表現する。
- ④クライエントが対象と和解する。すなわち悲哀とともに

に対象への過去の思いを真に断念し、対象との新しい関係を確立する。

この①②の過程、すなわち「満たされる」過程と、③④の過程、すなわち「断念する」過程とは、おそらくはいずれも治療において不可欠な要素であり、それらが両輪となつて治療が進行するのだと、私は考えている。^{⑥⑦}

2 「満たされる」ことをめぐるパラドキシカルな状況

ただし、ここで、治療実践上、留意すべき非常に重要なことがある。今、上に、治療においてクライエントが「満たされる」ことが必要不可欠である、と述べた。この言葉を素朴に、単純に受け取れば、治療者は、クライエントを「満たす」ことを治療の目標にして、「満たそう」と努力するべきだと取れる。しかしながら、この受け取り方はまったく便宜的な意味においてしか正しくない。

というのも、クライエントが「満たされる」ことは治療における不可欠の要素であるが、これはあくまで結果として生じることが期待されることだからである。治療の目標は、クライエントを「満たす」ことにはなく、あえて言えば、クライエントが結果として「満たされた」と感じるような治療を実現することにある。治療の直接の目標として、

「満たす」ことを掲げるのは、危険である。というのも、「満たそう」との治療者の意図が含ま持つ、人為性や操作性が、かえってクライエントが自然に満たされたと感じる過程を妨げてしまうからである。治療者は、全体としては、すなわち広い意味では、クライエントが治療において満たされることを期待しつつ治療を進めているわけではあるが、それはくつきりとしたシャープな意図（図と地の図）ではなく、もっとぼんやりとした背景（図と地の地）としてのことである。それを背景にして浮かび上がる図としてはむしろ、満たそうという意図の放棄があるべきだと思う。これはクライエントの側から言っても言えることであり、クライエントが「満たされたい」、あるいは「満たされて然るべきだ」、「満たされる権利がある」と貪欲に望む限り、自然に満たされる体験は得られないであろう。満たされようという貪欲を捨てることが出来たとき、結果として満たされる体験が得られるのである。

心理療法において治療者はクライエントを満たす、というように言い方はしばしばなされるものであるだけに、上述のことは特に銘記されるべき事柄であると思われる。非常にしばしば、このような言葉が安易に受け取られ、有害な結果を招いているように思われる。上述のことを十分に

認識した上でも、あえてそういう表現が取られる場合もあるが、その場合には、そのような言い方自体が既に、心理療法にありがちなパラドキシカルな味わいを含んだ表現と受け取るべきである。

四 ネガティブな一体感とポジティブな一体感

これまでの所では、一体感を、様々な要素が錯綜する生きた混沌として記述してきた。ここでは、そのような性質を殺さないよう注意しながらも、より分析的に考察してみたい。最も基本的な二分法の一つとして、ネガティブなものとはポジティブなものとを分けることができるだろうが、ここでもその二分法を採用することとしよう。

ネガティブ、ポジティブというのが、ここでは、どのような意味でのことを明らかにしておく必要があるだろう。以下でいうネガティブ、ポジティブというのは、個の成長にとって破壊的に作用するか、建設的に作用するか、という観点に拠っている。すなわちネガティブとは、個を抹殺する方向性を意味し、ポジティブとは個を確実にする方向性を指している。

したがって、ここでのネガティブーポジティブは、不快

―快と単純に対応するものではないことに留意されたい。後述するように、ネガティヴなものであれ、一体感への切実な願望が満たされた時には、安堵という快の性格を帯びた感覚が伴うものである。

ネガティヴ、ポジティヴという要素は、現実には明確に分けることの出来ないものであろうが、そのような概念的な区別を念頭に置いて眺めることによって、一体感を構成する力動を明らかにしたいと思う。

1 ネガティヴな一体感

一体感への切望は、個としての機能の低下を目指し、最終的には、個としての自己の完全な喪失を目指すものである。ネガティヴな一体感の場合でも、それが叶った時には深い安堵感が得られるのであろう。しかしながら、それが叶うまでの間、個としての自我が少しでも機能している限り、それは無力感を味わい続けていると思われる。あるいは、違った言い方をするなら、個としての自我が無力感を感じているからこそ、その無力感が原動力となって自己を消滅へと向かわせるのだ、と言えるであろう。

問題になるのは、このような一体感から覚醒した時、個としての自我が、どのような状態になっているかというこ

とである。良き一体感は、そこから覚醒した個をいっそう堅固にし、力を与えるものと言えるが、悪しき一体感は、個に力をつけさせず、むしろ分離後の個にいつその無力感を味わわせるものと言えるだろう。

そのもっとも典型的な例は、アルコールやシンナーなどの薬物依存の状態に見ることが出来る。そのような状態では、個の機能低下、消滅が目指され、幻想的にそれが叶えられる。そして、確かに安堵感は得られるかもしれないが、それによって個が力を得ることはなく、現実には直面すると無力感を生じて、また薬物による安堵感に回帰するという悪循環が生じる。

彼らが一体化し、呑み込まれようとしている対象を、ユング派では、ネガティヴ・グレートマザーと呼んでいる。ネガティヴ・グレートマザーは、個を呑み込み、保護するが、個の力を育てないために、個を無力にしてしまう。個の方は、無力ゆえに、ネガティヴ・グレートマザーを欲し、その元に回帰しようとする。しかし、回帰すればするほど、個としての力は育たないので、結局、離れられなくなってしまう。

しかしながら、一見したところ、ネガティヴ・グレートマザーを望み、それにしがみついている彼らは、実はその

裏では、恨みや怒りを抱いてもいる。結局の所、ネガティヴ・グレートマザーは、個としての彼らを支持しない。常に、ダメだ、ダメだ、情けない子だ、と個を押しつぶそうとする。その結果、彼らはグレートマザーに依存せざるを得なくなるわけだが、そうしつつも、支持されなかった個が抱く恨みや怒りは潜在的にはついつつゆくののである。

このように見てくると、ネガティヴな一体感とは、無力感と結びついたものであることが分かる。無力感—一体感(安堵)という軸が認められるのである。そして、その軸とは離れて、恨みや怒りの感情が、おそらくは存在している。このような一連の構図が、ネガティヴな一体感を特徴づけるものである。

2 ポジティヴな一体感

全ての一体感をネガティヴなものに見なすことはできない。我々がもし、完全に一体感を放棄し、常にまったくの個として生きているとしたら、恐ろしい孤独感にさいなまれざるを得ないであろう。たとえ意識しなくとも、我々が恐ろしい孤独感にさいなまれずに何となく生きていけるのは、我々の存在の暗黙の基盤に、他者との一体感が据えられているからに違いない。

一体感とは、個の拠って立つ基盤であり、個がそこから立ち現われてくるところの源泉である。ポジティヴな場合、それは、分離された後の個に存在の基盤を与え、個を生かし、これでよい、という安心感や自信を与える。それは、個の自立性を奪うものではなく、むしろ、個の自立性・自発性を高めるものとなるだろう。個は、このような一体感に基礎づけられている時、よりいっそう確固として機能できるようになるだろう。

たとえば、我々の毎日のリズム、睡眠と覚醒のリズムのことを考えてみよう。睡眠において、我々は自己を喪失する。よき睡眠においては、快適なまどろみがあり、やがて安逸の中に完全な自己喪失がやってくる。朝には、そこから自己が立ち上がってくる。その時、個としての明確な境界を取り戻した自己は、力を得ており、一体感から分離してその機能を発揮することに喜びを感じる。夕刻には、分離して機能することへの喜びは後退し、安逸な一体感への欲求が強まる。分離へのベクトルと、一体感へのベクトルのリズムカルな交替が、健康な生活の特徴づけている。

この場合には、一体感は無力感と軸を成すものではなく、むしろ、有能感(コンピテンス)と軸を成している。すなわち、有能感(活動の喜び)—一体感(安逸)という軸を

成している。

3 ネガティヴな一体感における理想化

ここで考えねばならないのは、ネガティヴな一体感、すなわち無力感——一体感の軸上の一体感における、理想化の問題である。

シンナーを吸って観音さまの幻覚を見たり、あるいは、夢でセラピストに抱かれる体験をしたとしても、それが単に、そのような心地よい経験をした、というエピソードにとどまったり、あるいはさらに悪く、繰り返しそのような体験を得ようと執着し続けるなら、たとえその一体感が心地よく、至福のものであったとしても、個の成長にとっては何ら資するところがなかった、あるいはむしろマイナスであった、と言わざるを得ない。

そのような一体感が幻想的に満たされても、それが個人の成長に直接的に役立たないのは、そこに理想化が働いているからだと思われる。上述のクライエントのように一体感を性急に求めるような人たちにおいては、一体感は理想化され、完全に至福の救済と見られている。そのような人においては、一体感こそが、実は自らの個としての成長を阻むものでもあるという、ネガティヴな面は完全に無視さ

れている。

また、先のクライエントは、赤ん坊の状態に憧憬を抱いていた。認知機能が未発達な乳幼児は、確かに、一体感的で融合的な至福の体験に開かれているであろうが、それと同時に、明確な認知によって未だ限界づけられていない不安——大人にとっては想像すら出来ない不安——にもまた開かれているはずである。しかし、前述のクライエントは、赤ん坊の不安は無視して、至福の一体感のみを見ているのである。そこにも理想化が働いている。

私が事例を挙げて、一体感への願望として述べてきたものは、理想化の傾向を色濃く帯びたものであると分かる。彼女たちにおいては、先のネガティヴ・グレートマザーの記述がよく当てはまるのであり、理想化は、ネガティヴなものと表裏一体である。となると、この理想化された一体感を、真にポジティヴな一体感と混同しないようにしなければならぬであろう。しかしながら、それは少々困難なことである。というのも、少なくとも、理想化された一体感の幻想的な満足は、個人の自我を強化するような真にポジティヴな一体感の体験への、第一歩であると考えられる節があるからである。理想化されたものではあれ、そのような体験がまったく無くして、先へ進めるとは思われない。

つまり、無力感—一体感の軸上の一体感と、有能感—一体感の軸上の一体感とは、少なくとも部分的には重なっていると考えねばならない。

理想化された一体感が幻想的に満足されることは、おそらくは必要な道筋なのではあろうが、そこに固執しては、個人の自我の成長は得られない。個の成長のためには、その理想化から醒めてゆかなくてはならない。この場合、個人の自我の成長の道は、幻滅と悲哀という、つらい道程となる。そして、その悲哀の仕事こそが、理想化された一体感体験を、その背後にあって無視されていたネガティブな体験と、統合することになるのであろう。

五 終わりに

我々はすべて、心の中に、多かれ少なかれ、理想化された一体感への願望を抱いているのであろう。そして、それに対する悲哀の仕事を、我々は永久に続けてゆかなければならないのであろう。

本小論は、決して明快なものとはなり得なかったが、この問題に何らかの示唆を提出するものであれば幸いである。

註

① こういったアプローチの方法は、決して新しいものではない

く、むしろ臨床心理学の領域においてはオーソドックスなものでさえある。たとえば、フロイト・S、ペイトソン・G、土居健郎、河合隼雄、などが、このような立場を主張してきた。しかしながら、このように古くから数々の有力な著者たちが繰り返し訴えてきたにもかかわらず、一般に研究者の間では、一義的な定義とその上に構築された学問体系への欲求が根強く、それを満たさないと科学的・学問的でないとして攻撃されてきたように思われる。フロイトが性の概念の説明の中で述べた一節を引用しておく。

「……上述の諸関係について思弁的な理論をうちたてるのは、まずその根底として明確に定義された諸概念を獲得しておく必要がある。しかし私にいわせれば、それこそまさに思弁的理論と経験の解釈のうえに築かれた学問とのあいだの相違なのである。後者は思弁に特有の円滑な、論理上非のうちどころのない基礎づけを羨んだりせず、むしろ曖昧模糊とした、ほとんど表象しえないようないくつかの基本思想で満足するであらうし、それらを展開の途上でいつそう明らかに把握しようと望んでいいるが、場合によってはそれらを他の思想と交換することも辞さないものである。つまりこれらの観念はそのうえに一切のものがのっているような学問の基礎なのではない。基礎をなすものはむしろ観察だけなのである。」(フロイト・S「ナルシズム入門」『フロイト著作集 5』人文書院 一九六九年)

② 関連する用語として、次のものが挙げられる。大洋感情

(Freud, S)、『共生』二者単一体 (Mahler, M)、『甘え (土居健郎)、『受身的対象愛 (Balint, M)、『擬似母胎内埋没性 (Schachiel, E. G)、『存在の連続性』と抱く (Winnicott, D. W)、『樂園願望 (Jacoby, M)』など。

③ 本小論は、拙論「擬似母胎内世界に埋没した青年たちとの心理療法——満たすことと断念を促すこと——」(大谷大学哲学論集 第38号 pp. 57~70 一九九二年)の延長上に位置している。併せてお読みいただければ幸いである。

④ 本誌は、心理療家のための専門誌ではなく、広く他の専門分野の読者に開かれた学術誌である。本誌のそのような性質を考慮するならば、専門誌以上に、クライエントのプライバシーへの配慮が必要とされる。したがって、以下の事例の断片には、あえて事実と異なって記述したところもある。ただし、その際には、内的な真実を損なわないよう努力したつもりである。ここで提示される素材はそのような性質のものであるが、本小論の考察にとっては、なお十分有用なものであると考える。

⑤ 転移性恋愛に伴い、治療者に抱かれないという願望が起ってくる。これは表明されることや、時に、行動化される(治療者に抱きつくなど)こともあるが、表明されないことも多い。転移性恋愛は、一体感への願望が、性急にも、物理的・身体的な次元で現われたものと考えることが出来る。ちなみに、マラーは、共生期について述べる中で、「多くのかなり正常な大人たちが、抱いたり抱かれたりすること

に、いかに切実な憧れを抱いているか忘れないようにしよう。」と述べている。(マラー・M・S『乳幼児の心理的誕生』高橋雅士ほか訳 黎明書房 一九八一年)

また、これと関連して、演劇のレッスンを通じて独自の治療の実践を展開している竹内敏晴が、次のように書いているのは参考になる。彼は、「出会いのレッスン」において、一人がもう一人の胸に抱かれ、「ほっ」として、溶けるみたいに楽だった」と感想を述べた例を挙げ、「呑み込まれたがり、呑み込まれた時、ホッとするからだは、まことに多い、と気付くのだ。私のレッスンなどもすぐそのような仕掛けに化けさせられてしまう危険に常に臨んでいるのだ。」と述べている。この時、抱かれた人が、「安らかに満足した表情、というよりは、どこか哀しげな目」であったというのは、本小論において後に触れる悲哀との関連で、特に興味深い。(竹内敏晴『からだ』と「ことば」のレッスン』講談社現代新書 一九九〇年)

⑥ 当然のことながら、ここで述べている「満たされる」という言葉の意味は、表面的な同意や同調を与えられることや、迎合、懐柔されることではない。

⑦ ゼドとゴールドバーグは、心の発達段階と、それぞれの段階での防衛機制ならびに治療的対応を定式化している。それによれば、どちらかと言えば「満たされる」性質を帯びた鎮静化や一体化は発達初期の段階に、どちらかと言えば「断念する」性質を帯びた脱錯覚や解釈や断念は後の段階に定型的

なものとされている。彼らの考えによれば、治療においても、満たされる位相を経て、断念する位相へという継時的な過程が生じることになる。しかしながら、青年あるいは成人の心理療法においては、これら二つの位相はもっと錯綜した形で、相互に影響を与え合いながら同時に進行するのではないだ

ろうか。これについては、なお検討してゆくことが必要であろう。(ゼド・J・Eとゴールドバーグ・A『心の階層モデル』前田重治訳 誠信書房 一九八二年)

(本学専任講師 臨床心理学)

(平成四年五月六日受付)